〈編集後記〉

科　学　と　技　術

3月この方，毎日のように垂れ流されるオウム真理教の報道にはいささか食傷した。特に腹が立ったのは，マスコミによって繰り返し述べ立てられた「あの教団が優秀な若い科学者を集めた」という下りである。優秀だったかどうかは別として，サリンを作ることを科学だと勘違いしている程度の低さはあきれはてるばかりである。まったく新しい合成法を考えだしたのでない限り，サリンを作ることは技術であって科学ではないことは明白だろう。

最近，「科学技術」という言葉が流行る。日本語の構造からして，科学は技術にかかる形容詞のようなものだから，「科学的な技術」という意味だろう。この用語の主体は，あくまで技術にある。私はなにも，「科学」が「技術」より上だとか，下だとか言いたいのではない。この二つは異なるものだと言いたいだけだ。「科学技術庁」か「科学・技術庁」かは実は大きな問題をはらんでいるのだ。

4月20日に行われた日本学術会議，第121回総会の基調報告で，伊藤正男会長は，「日本学術会議の課題」と題して，我国の学術体制の現状と将来を概観し，高度研究体制の必要性を主張している（ここでは触れないが，彼の主張そのものが，「国家利益にかなう学術」とか，かなりあぶないので，ご一読をお奨めする)。この中で，彼は「科学」と「技術」の境界が曖昧になったと断った上で，中丸抜きの「科学技術」をやたら連発している。日本の学術を担う最高の責任者のこうした曖昧さが，一般の人が冒頭のような誤りを犯す傾向に拍車をかけているのではあるまいか。

自然保護にも，このごろ「技術」を求められることが多くなったような気がする。「科学」は自然の保護に何ができるのかを，KONCのこの会報を通じて会員同士考え合っていけたらいいと思う。

ところで，今回編集責任者を降ろしていただくことになった。長期間にわたるご協力に心から感謝したい。後任は山倉拓夫氏である。彼の斬新な編集を期待して，老兵は消えて行きたい。

（山岸　哲）